

photo: 竹部 祐樹(写真右下)

### ごあいさつ

「水害」と「現代美術」という一見妙な組み合わせだと、この話が持ち掛けられたときは、RING ARTとしては大変戸惑いました。まるで現代美術が害を及ぼすような印象だ、などといった話も出たほどです。

今夏、連日のように大雨による災害の様子が報道されました。福岡や大分でも甚大な被害を受け、現在もその復旧作業が続いています。今や日本では、いつどこでこのような災害が起きてもおかしくはない状況にあると言えます。私たちは自然の中で暮らしている以上、その豊かな恩恵を受けつつも、こうした自然災害の脅威にさらされていることも認識しておかなければなりません。

今回、私たちは本展の企画・運営を通して、あらためて自然とアートとの関わりについて考えさせられました。作品展示(インスタレーション)、ギャラリートーク、ワークショップ、パフォーマンス、あるいは美術館関係者との運営・企画の折衝といった、この展覧会を実現していくためのプロセスと関連したイベントを通して、あらためて「我々アーティストの果たすべき役割な何か」という問いかけを追い続けました。そのプロセスや本展を通して見えてきた「アートの役割」について記録として本誌にまとめました。本誌を通して、私たちRING ARTが目指す地域におけるアートの貢献をいくらかでも感じ取っていただければ幸いです。また、ささやかながら本誌が地方におけるアートの在り方を提起する機会となることを望んでいます。

この大きな問いかけは、RING ARTにとって今に始まったものではなく、私たちは長年長崎から「平和」とアートについて、活動を続けながら問い続けてきたテーマです。被爆から72年目の今年の夏は、RING ARTは今年も「8+9展」を開催します。そこでの目玉企画として、「アートの使命を問う」というテーマでフォーラムを開催します。これまでの私たちの目指すアートについて、皆様と意見を交換し合う機会となります。是非多くの皆様にご参加いただきたく思います。

最後になりましたが、本展の趣旨に賛同いただいた作家の皆様、支えていただいたスタッフの皆様にご感謝申し上げます。そして、本企画をRING ARTに依頼していただき諫早市へ敬意を表し、今後の市の益々のご発展を祈念しています。

(RING ART会長 野坂 知布)

「アートのか～諫早大水害60年・現代美術展～2017」報告書  
 編集・発行 RING ART 発行日 2017年8月26日  
 E-mail : info@ringart.jp http://www.ringart



アートのか

諫早大水害60年・現代美術展

2017

諫早市美術・歴史館 7/1-7/30







本明川 (鎮魂と記憶)

photo: 竹部 祐樹





眼鏡橋を飾りました！

## 「折り鶴ワークショップ」

日時：7月1日(土)・2日(日)  
①10:00~12:00 ②13:00~15:00  
場所：諫早市美術・歴史館 エントランスホール

初日、集まった子供達と共に鎮魂の祈りを込め、「折り鶴」を作りました。その後、大人から子どもまで世代を超えて多くの方が参加し、出来あがった折り鶴を2連のアーチ型に飾って「眼鏡橋」モニュメントが完成しました。子供達の明るい笑顔と歓声が会場を満たしてくれました。



子どもたちと鑑賞会



祈りを込めて！

「諫早大水害60年展に寄せて」(仮)  
藤松 綾子(親和アートギャラリー学芸員)

(この文章はダミーです。)諫早大水害から60年の節目の年ですが、人生で言えば還暦にあたります。還暦とは干支(十干十二支)が一巡し誕生年の干支に還ることです。私たちRING ARTは、この節目の年に大水害を振り返り、アートの力で何が表現できるかを試みています。RING ART は常にアートの創造の継続、更新を実現しています。この度、アートの力でどのような貢献ができるか、その役割や使命を感じながら、次世代の子どもたちへメッセージを伝達し、大水害の記憶を風化させないように、また鎮魂の意を表し、さらに希望に溢れるようなアートの表現を目指しています。

ギャラリー内に、大水害の記憶を呼び戻す本明川と眼鏡橋をモチーフにしました。その川沿いに繰り返しますが、鎮魂をこめ、子供さんらへのメッセージとなるように、その記憶や未来に向けて希望に溢れる美に満ちた世界へと誘います。さらに川沿いに本明川の小石(7月25日に因んで725個揃えました)などを設営もし、RING ART の作品群をインスタレーションすることで、鎮魂と未来に向けて、教訓と希望と夢を与えたいと思います。

特筆すべきは、川沿いのギャラリー奥まったガラス窓に、当時諫早在住者だった少年が当時の記憶に基づいて、かつての「眼鏡橋」の風景画2点を描きました。ギャラリー全体を引き締めております。もっと具体的に言えば、ギャラリーには、本明川を象徴的に、その川幅として白い大きな画用紙で床に敷き、その流れの両サイドに沿って、作品群を飾ると共に、それら作品群が一体となって一つの作品にも見え、さらに作品を見られる観客らも溶け込み、一体化となるような新しい表現を試みています。その白い画用紙上には訪れた来客の足跡が、つまり鑑賞される方々は鎮魂を込めていますから、鎮魂の足跡にもなります。さらには窓ガラスにも作品を取りつけ、室内外からも鑑賞できるように、ギャラリー外の風景、大地、空までも希望や夢が広がっていくようにしています。

会場に設置した本明川の小石1つひとつにも命が宿り、未来が宿っています。そういうものも併せて感じ取ってくだされば有難いです。何よりも、今回諫早市が現代美術に目を向けられたこと、同時に還暦同様のタイムリーな節目に、アートの使命を探求しているRING ARTに、アートによる創造の機会を与えてくださったことに、RING ART一同感謝しながら、これからも人類のために、素晴らしいアートの表現に努めてまいります。会場に設置した本明川の小石1つひとつにも命が宿り、未来が宿っています。そういうものも併せて感じ取ってくだされば有難いです。何よりも、今回諫早市が現代美術に目を向けられたこと、同時に還暦同様のタイムリーな節目に、アートの使命を探求しているRING ARTに、アートによる創造の機会を与えてくださったことに、RING ART一同感謝しながら、これからも人類のために、素晴らしいアートの表現に努めてまいります。

会場に設置した本明川の小石1つひとつにも命が宿り、未来が宿っています。そういうものも併せて感じ取ってくだされば有難いです。何よりも、今回諫早市が現代美術に目を向けられたこと、同時に還暦同様のタイムリーな節目に、アートの使命を探求しているRING ARTに、アートによる創造の機会を与えてくださったことに、RING ART一同感謝しながら、これからも人類のために、素晴らしいアートの表現に努めてまいります。会場に設置した本明川の小石1つひとつにも命が宿り、未来が宿っています。そういうものも併せて感じ取ってくだされば有難いです。何よりも、今回諫早市が現代美術に目を向けられたこと、同時に還暦同様のタイムリーな節目に、アートの使命を探求しているRING ARTに、アートによる創造の機会を与えてくださったことに、RING ART一同感謝しながら、これからも人類のために、素晴らしいアートの表現に努めてまいります。

### 現代美術 (企画 RING ART)

#### 趣旨

#### アートの力

諫早大水害から60年の節目の年ですが、人生で言えば還暦にあたります。還暦とは干支(十干十二支)が一巡し誕生年の干支に還ることです。私たちRING ARTは、この節目の年に大水害を振り返り、アートの力で何が表現できるかを試みています。

RING ART は常にアートの創造の継続、更新を実現しています。この度、アートの力でどのような貢献ができるか、その役割や使命を感じながら、次世代の子どもたちへメッセージを伝達し、大水害の記憶を風化させないように、また鎮魂の意を表し、さらに希望に溢れるようなアートの表現を目指しています。

#### 表現内容について

ギャラリー内に、大水害の記憶を呼び戻す本明川と眼鏡橋をモチーフにしました。その川沿いに繰り返しますが、鎮魂をこめ、子供さんらへのメッセージとなるように、その記憶や未来に向けて希望に溢れる美に満ちた世界へと誘います。さらに川沿いに本明川の小石(7月25日に因んで725個揃えました)などを設営もし、RING ART の作品群をインスタレーションすることで、鎮魂と未来に向けて、教訓と希望と夢を与えたいと思います。

特筆すべきは、川沿いのギャラリー奥まったガラス窓に、当時諫早在住者だった少年が当時の記憶に基づいて、かつての「眼鏡橋」の風景画2点を描きました。ギャラリー全体を引き締めております。

もっと具体的に言えば、ギャラリーには、本明川を象徴的に、その川幅として白い大きな画用紙で床に敷き、その流れの両サイドに沿って、作品群を飾ると共に、それら作品群が一体となって一つの作品にも見え、さらに作品を見られる観客らも溶け込み、一体化となるような新しい表現を試みています。その白い画用紙上には訪れた来客の足跡が、つまり鑑賞される方々は鎮魂を込めていますから、鎮魂の足跡にもなります。さらには窓ガラスにも作品を取りつけ、室内外からも鑑賞できるように、ギャラリー外の風景、大地、空までも希望や夢が広がっていくようにしています。

会場に設置した本明川の小石1つひとつにも命が宿り、未来が宿っています。そういうものも併せて感じ取ってくだされば有難いです。

#### 謝辞

何よりも、今回諫早市が現代美術に目を向けられたこと、同時に還暦同様のタイムリーな節目に、アートの使命を探求しているRING ARTに、アートによる創造の機会を与えてくださったことに、RING ART一同感謝しながら、これからも人類のために、素晴らしいアートの表現に努めてまいります。

RING ART一同





韓紙を縫う、そして祈り



水族館みたいでしょう（屋外から）



諫早大水害（1957）と長崎大水害（1986）



photo: 竹部 祐樹

まりもが見えませんか？



## 「現代美術作品と今回の作品展の関わりについて」

ウエダ清人

諫早大水害から60年目の今年、60年を迎えるにあたり鎮魂の思いを込めた作品展は、様々な意味で出品者及び鑑賞された人々にとって意義深いものとなった。美術作品の表現は、制作者によって多様である。自分の生き様を作品に込めること、制作に対する喜びを自由気ままに表現すること、自己が見た感動的な自然や物を素直に表現すること、こうした表現は、制作者個人に課せられた制作課題ではあるが、今回の作品展の趣旨は、この地で被災した多くの犠牲者を鎮魂すること、またこれから生きていく人々が災害の記憶を忘れず、風化させないという観点からも貴重な美術展と考えている。

この美術展は、災害を身近なところで体験された作家の思いが込められた数々の作品や、子どもたちがワークショップで作上げた「折り鶴」による眼鏡橋の作品、作品展の開催趣旨に賛同した現代作家たちの作品など、作家と地域住民とを結び付けた活動となった。今回の出品作品は、現代美術が中心となっているが、これらの作品を難解に捉えず、観覧者の自由な思いで受け止め、災害について考える機会となるのが大きなねらいであると思う。

## 「立ち上げプロセスと対応」

波多野 慎二

運転中の電話だった。1年前に立ち寄った諫早美術歴史館の副館長K氏からだ。話の内容は今年の美術館の目玉企画として諫早水害60年目を現代美術展で盛り上げたいということだった。また、現代美術の展覧会は経費がいくらかかるのか助言を聞きたいと言う話だった。経費はその作家次第でどうにでもなるし、また、そう言う内容なら作家は協力を惜しまないと話した。2月になり、一度、美術展の話をしたと連絡があり、現代美術はどのような関わり方ができるのか、具体的な意見を求められた。つまり、私に現代美術を使った企画の相談だった。その後連絡は来なかった。3月の市長選で現在の市長が再選すれば企画が通ると連絡がきた。市長は再選した。5月になり、企画が通過したと連絡があった。より具体的な話をしたいので一度美術館に「お越し頂きたい」という話になった。その頃私たちリングアートも諫早の話をしていた。リングアートの力ならこの企画に十分対応できる自信があった。また、平和活動で培った経験が鎮魂と平和、未来へと記憶を語り継ぐ今回の企画に有効に働くという確信があった。そこで、美術館側の方向性が決まったので具体的な話をしたいと連絡がきた。5月21日(日曜日)午後1時に井川、野坂、波多野が美歴館に向かった。美歴館では学芸員のY氏らが対応した。

美術館では既にチラシやポスターをデザインしていた。井川先生からは題名の変更案がでた。現代美術の言葉はできるだけ控えめにして諫早水害と言う事実を協調してはどうか、また、+や×という記号は意味がよくわからない。はっきり言って良くない、特に×はイメージが悪いなど、また、周年の周という字は外した方がよい。祝い事に使う周年のイメージは展覧会自体の性格を決める題名として再検討してほしいと話した。美術館側は眼鏡橋を生かして、水害、防災を連想する現代美術の望ましいと提案をされた。また、子ども達が参加できる展示をしてほしいと提案していた。私たちは展示のイメージはこちらに任せてほしい、眼鏡橋を提案するなら眼鏡橋を使わせてほしいと話した。眼鏡橋は所轄が違うので使用は時間がかかる。しかし可能な範囲協力は惜しまない。また、このような企画の美術展は人が集まらないのが通例である。リングアートの言う、人を集めなければ成立しないオープニングや音楽会の企画は難しいと考えている。人の動員は努力後の話でその為に企画が成立しないから変更するのはおかしいなどなど、美術館で音楽演奏が問題になるとは夢にも思わなかった。以下の文章は野坂会長がまとめたやりとりの要約である。

1) 報告書の作成について→当予算の中での支出は不可とさせていただきます。

2) オープニングセレモニーについて→現在のところ予定しておりません。

3) 本展のタイトルについて→予定どおりとさせていただきます。

なお、「周年」の使用につきましては、諫早市ではこれまでも使用してきた経過もあり、また、公用の言葉として使用することに問題もないことも確認しておりますが、近年の被災者の心情を配慮する考えもあることから、再度内部で協議させていただきたいと考えております。

4) アート・パフォーマンスについて→本展の関連として行うアート・パフォーマンスについては今回考えておりません。

5) ギャラリートークの実施→リングアート様がよろしければ実施したいと考えております。

6) 子ども向けのワークショップの企画→実施したいと考えております。

7) チラシのレイアウトについて→印刷会社からデザインがあがった時点でリングアート様にも確認していたく予定です。

8) 本展の運営責任者は波多野慎二(活水高校)とする。→「現代美術」に関する運営責任者として承知しました。

9) 予算の用途について→1)で回答したとおり、パフォーマンスに係る費用及び報告書の制作費につきましては不可とさせていただきます。

10) 防災展示のトークについて→検討させていただきます。

私たちはこの回答をもとにもう一度、美術館側と意見交換をした。美術館側のよりよい美術展を作ることに協力すると言う基本姿勢は理解できた。しかし、始めて行う企画が多く、前例のない企画や提案には躊躇していた。特にパフォーマンスや鎮魂の意味の演奏会などがどこまで実現できるか迷走した。リングアートはリアリティと客観性を軸に対応していた。その後、日程の調整を行い提案の7割が実現可能となった。

事前に2度にわたり会場を井川、波多野で訪れた。会場の下見である。下見で大切なのは測量と井川先生が何度となく話をしていた。現地測量と記録、これによってインスタレーションが可能となるとしている。その為に会場のパネル設置の状況、照明の位置、また、床に貼られたタイルの大きさとその数、それらは性格に記録していく。記録してわかったことは窓枠の幅が数cmずつ全て違うこと。パネルの移動ができない場所があること。会場を生かすためにどう各自の作品をどう配置するのか、図面化して検討した。リングアートが他の現代美術展と違うところは井川惺亮という作家の采配を最大限に生かすことができるということである。展示に当たり、中央に本名側を模した幅1.8mのケント紙を貼り、長さ25mあまり会場を斜めに横切った。その脇に本名側の石を725個置き、川のイメージを強調させた。壁は極力配置せず、中央にパネルを二枚だけ置き、作品で作品を区切る形で構成された。それにより作品が作品を隠し、また、重なり、各作品が干渉し合った。それぞれがインスタレーションの醍醐味である。個々の作品の特徴や芸術性を損なわないように生かす展示はその場になければわからない緊張感があった。そうして会場が一体となる展示ができた。例えば吉岡氏の作品から感じる湯気のような色が隣の福島氏の滝の写真の水の飛沫(すぶぎ)となり飛沫は虹になり、虹の曲線はそのままナイアガラの流れに乗って、落ちる。写真の前には井ノ上氏の作品が全体を隠して、見にくくしている。しかし空調に揺れる作品は自然の風を感じさせる。会場中央を流れる本明川は角に当たると松尾氏的眼鏡橋にぶつかる。眼鏡橋の設置位置の曲線上には実際の眼鏡橋がある方向を指している。作品一つ一つの関わりが周囲の環境も作品としている。







入館者数ベスト3のRING ART展  
＜長崎発インスタレーション＞  
井川惺亮

アーティストのセッティングは“測量と空間”を手係りに即興的な決断と共に、いつも真剣だ。展覧会期中、季節柄豪雨による河川の氾濫の報道に接して、「タイムリーだ」等と言えず、また大水害展なのに「花開くアート展となった」と言う訳にはいかない。それでも周辺を見渡すと、祈念日の夜、万灯は川に浮かび、夜空に瞬く花火は夏の風物詩となる。幾多の鎮魂が込められ、同時に侘しくて儂い美しささえも感じるあの夏の日の、また思い出や悲しみなど全てを包み込んで7月25日の行事は終わった。本展は今までのRINGART発表でも最もクライマックスとなった“長崎発インスタレーション”の美を醸し出した。

西南面がガラス張りの開放感あるギャラリーをフルに生かすこと。RING ART各人は、自己課題の素材との対話をし続け、結果的に殆どが透過性のある表裏両面性を備えた軽くて大きな作品となるように創って来た。だからインスタレーションはどんな場所でも展開可能で魔法のように操られる。セッティング最中に、県道から県認定婚活サポーター関係者が飛び込んできた。「車から素晴らしい催し物が見え、来てみると更に感動した。この光景を撮影、使用してもよいか」と許可を求められた。私たちは鎮魂と記憶の表現を求めているが、よく考えるとこれは真逆でないぞ、むしろ婚活にも私たちのアートが何某かの活力を求めた意外性に、これもアート之力だと思う。そういう側面性が前述の鎮魂祭にもあり、アートもしかり。だから「花開いたアート」展となった。

市当局が私たちに望んだことは、「現代美術展で、来客が『あっ!』と驚くようなもの」と、「展示会場に“眼鏡橋”を並べて欲しい」とのことだった。そこでロールケント紙(幅180cm、長さ20m)を床に敷き本明川に見立てて、“眼鏡橋”作品を設営した。更にワークショップに参加した近くに住む園児らが着色した折り鶴群を眼鏡橋に見立て会場入口に飾った。子どもらに託した2つのアーチ状の折り鶴群は被災への継承となり、即希望と未来への力ともなった。川の両脇には本明川から採集した石ころ725個を並べ、小石は大きさや形状がまちまちで、じっと見れば生きてきた存在感が宿る。

諫早大水害60年展だが、作品群は殊更明るくて透明感があり、しかも浮揚し周辺の作品と交互に干渉し合い外へと拡がる。個々の作品の境が消失することで被災の鎮魂への想いと蘇る記憶が一体感となる。もっと言えば作品群の間から遠近融合し響き合い、かえって個々の作品が映えてくる。繰り返すが、みなぎる美がエネルギーとなってギャラリー全体を旋律させ、どの場所からの鑑賞でも次々と飽きることなく、お互いの作品は空間と重なり溶け込み、そして光り輝く。どこまでも。





## ギャラリートーク① 2017年7月1日(土)

展覧会初日、オープニングセレモニー後に出品した作家たちが、通常のように自作について語りました。

## ギャラリートーク② 2017年7月15日(土)

2回目のトークでは、1回と趣を変え、3名のパネリストとコーディネーターと共に、各々、被災者の体験とアーティストとしての立場から表現のリアリティについて語る。ポイントとして、被災のリアリティと、それをアートの表現としてどう捉えるか。その問いかけを、会場の参加者と共に語り合いました。(以下トークの要約)

### 前田 純子氏 (Slow Food Nagasakiサブリーダー・諫早大水害被災体験者)

今から60年前、10歳(小学校4年生)で被災した。当時本明川のほとり眼鏡橋が架かっていたすぐ側で生まれた。眼鏡橋付近一帯は全滅。死者が630名。父は連日遺体運び出す作業で疲れ、結核で入院。7月25日、諫早駅付近は腰のあたりまで浸水。当時の自宅は上山小学校の近く。県庁に勤めていた姉は夜の8時半ごろ帰宅。その後ますます雨が激しくなり、稲光が続く。青でなく緑の稲光が続く。1時間100ミリ以上の雨が続いた。朝方、諫早の街は全滅。人が浮いている。父は救助。感染症の危険があり、子どもらは1ヶ月間、外出禁止で市街に行けなかった。後書院多良岳からはマムシが流れてきた。有明海まで流れた人もいた。私は福岡・大分の水害の1週間前、大分湯布院から宝珠山、小石原などを回ったが、すべて水害でやられた。田んぼも3分の1の被害。本明川が護岸整備されていても、これからは集中豪雨がどこでおかしくない状況。自分たちの身は自分で守らなければいけない。

### 松尾 雄志氏 (本展出品者・諫早大水害体験者)

当時小学校3年生。自宅は床下浸水で助かった。その日はひっきりなしの稲光、落雷と雷鳴。土砂降りの雨。当時はテレビも普及する前。ラジオも聞こえない。停電し一切の情報がないまま過ごした。土砂降りや稲光のひどい中で、まず外に出ようとは思わない。3時間で400ミリを超えるような雨。避難もできず、情報もない。朝を迎え、自宅は幸いにも被害はなかった。学校に行こうとすると、福田橋の上から様子を見ると様子が一変していた。国道35号線と分岐の十字路の真ん中に2階建ての家が座っていた。すぐ引き返した。出歩いたときに、独特のすえたドブのような匂いがあった。

月日が流れて60年、ここで水害に関する現代アートの展覧会に参加することとなり、諫早から見える多良岳(五家原岳)の絵。下には眼鏡橋。水害は本明川、つまり多良岳の山麓、五家原岳の南側の地域に集中的に降った雨が、土石流となって諫早の街を襲ったというのが構図となっている。それともひとつは、瓦礫や流木が眼鏡橋にひっかかった。新しい橋は流されたが、眼鏡橋はしっかり残ったために、逆に被害を大きくした。憎き眼鏡橋を爆破して壊してしまえという話も一部にはあったが、文化財として残すことになり移設された。多良岳と眼鏡橋が水害の主要モチーフ。それをなんとか残したいと思って作品にした。

もうひとつ、防災の基本は何よりも土木工事や公共事業ではない。2011年の東日本大震災の津波を経験した。津波の被害は江戸時代から何度も経験している。あの地域は100年ごとに津波に襲われる。襲われると高いところに移住するが、不便なので降りてくる。また津波に遭う。人々の記憶が薄れてくると同じ被害に遭う。なんとかして記憶を残しておかないと同じことを繰り返すという歴史。だからこそ、記憶に残るために、眼鏡橋を見て、学びの手がかりになればという意味で作品を作った。

### 波多野 慎二氏 (RING ARTメンバー)

お二人の体験談を聞いてリアリティを感じた。毎日新聞「豊かな水」南アルプスで有名人の北川フラムがやっている展覧会が催された。ここで同じ自然の「水」がテーマとなり、本展と対比を感じた。我々の場合は「水害」で、この自然をどう捉えるかという展覧会になった。一般的な国際展はプラスの面、二面性のある一面(きれいな水)を捉える展覧会が多い。今回は僕の作品の中にも、二面性のある一面をどう捉えるかという関係が生まれてきた。現代美術のもつ二面性は、正面性の問題がうかがえる作品が多く入っている。つまり表と裏を感じさせない作品だ。自然の水であると同時に、水害が起こるかもしれないという危険性も持っている。アートにおいてもそれが言えるのではないか。この展覧会が現代美術と結びつく大きなテーマである。自然の裏と表が美術の裏と表の問題とつながったところが、僕は面白かった。

### 井川 惺亮氏 (RING ARTメンバー)

「今非常にタイムリーな展覧会だ」と言っただけではない。何故なら実際水害があつてはならないからだ。タイムリーをどう解釈するか。少なくとも私は「水害」のためにやっているのではないことは事実だ。しかし、こうして防災なり水害に関わってアート展をしないと見えてこないものがある。私たちはその中で、「アーティストはリアリティが持てるのか」ということと同時に、作り手は絶えず、絵画とは何かを考える。発表者としてのリアリティでは、今回私の場合、画用紙を本明川に見立てて、その上を歩く来客の足跡をつけることで、参加者も鎮魂と記憶を残そうとした。しかし足跡が残らないことが分かり、川が流れるように着彩しようとしたが、わざとらしく嘘をついているような気持ちになった。いつしかマルセイユを思い出して、身体性を伴うタッチへとなっていった。その方が私にとってのリアリティを得た。

さて仕上げた結果、そのタッチの上は踏めない。自分の絵を踏まれるのは辛い、「踏んでいいよ」と言うと格好はいいけれども、ここで絵画の表面をどう考えるかとなってきた。基本となる布や紙、材料への問いかけがあり、次に平面への新たな展開ができるか、と今回の本明川を通して勉強になった。アートというものは、「自然と人間の接点」ではないか。そういうところで初めて美術が存在する。これが、今回の展覧会で気がついたことである。

タイトルでは諫早市から「現代美術」を頭に出してもらい光栄だが、私たちとしては、「諫早大水害60年」と全国規模で打ち立てば、今回のような福岡・朝倉の豪雨による河川の氾濫、日本がもつ宿命のようなものに直結するからだ。今、アーティストとして今何をすべきか、自然やその脅威と畏怖とか日本の文化性を含めて、アートの表現ができればと考える。

最後に夏の「8+9」平和展に向けて準備しているが、水害60年の機会を生かして「アートの使命」を「フォーラム」で引き続き語り合う。今春佐世保でのRING ART展で「アートの使命」をキャッチコピーとして立ち上げていたから、こうして論理の一貫性を持ちながら、また前述の平和展で毎回「平和」という新たな言葉を見つけながら、活動を続けている。

## 「丸山常生アート・パフォーマンス」

日時:7月25日(火)18:00~19:00  
場所:諫早市美術・歴史館 エントランスホール

パフォーマンス・アーティストの丸山常生氏が、大水害の被災日に、記憶や鎮魂や希望をより深く、より瞑想的に身体的表現を行いました。



(見学者からの感想)

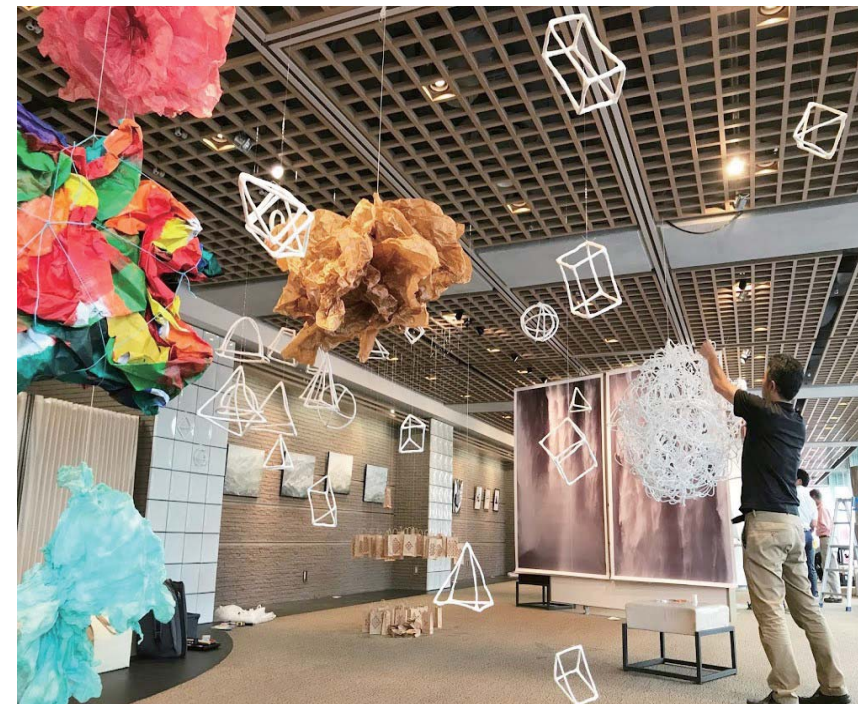
「垂木を投げたときに木の転がる乾いた音が響いた。そして、下に敷き詰められた紙が舞った。紙がずれて、地肌(床)が現れた。あたかも先日、福岡朝倉の水害の時に材木が山肌を削って災害を大きくした映像を思い出した。」  
「準備した本(約300冊)は自分で集めたのか。諫早の歴史を眼に見える形にしていた。」  
「朗読した文章が良かった。被災したことを思い出し、全くその通りだと思った。」  
「参加者が投げた垂木を一般ずつ立てる場面があった。みんなが立て終わった後に、最後に子どもが一人、一生懸命に立てていた。一人の子どもとそれを見つめる丸山氏の姿が印象的であった。」  
「中央の白い柱は、何だろうと思った。諫早の歴史書を積んでいくとその高さが水害の水没した高さであることがわかった。三メートル近く積まれた本は緊張感があった。」  
「何をするのか、始まるまでわからなかった。銀色の玉が転がる時に事態が動き始めたのだろうと感じた。椅子の小さな模型が、最後に塔の上に置かれたときに終わったと思った。また、それを下ろせ、とリクエストした人がいた。面白かった。おそらく小さな命を助ける意味もあったのかもしれない。」  
「記憶に残るパフォーマンスだった。」

アルカスSASEBO

RING ARTは今春、民家の茶室(ギャラリー雀庵)、アルカスSASEBOで井川惺亮展をスタートさせ、RING s ARTs展では「アートの使命を探る」というテーマで発展させることは、「諫早大水害60年展」につなげた上では大切なアートの役割を担ったこととなった。

## RINGs ARTs<アートの使命を探る>

2017年6月5日(月)~7日(水)



### 井川惺亮 絵画

2017年5月15日(月)~17日(水) LIZ JAZZの飛び入りライブ





